



カラスはどうして黒いの

黒い色がカラスにつごうがよかった

生物の体の色や形は、その生物にとって、いちばんつごうがよいものになっていることが、多いものです。地球上に生物が現れてから、30億年以上かかって、今見るようなさまざまな場所に、いろいろな生物が現れました。その間にも、今は見られない、たくさんの種類の生物が現れましたが、気候や環境の変化や、ほかの生物との生きる競争に負けて、ほろびていきました。今生きている生物は、すんでいるまわりの環境にあった体のつくりや、生活方法を、進化のとちゅうで、うまく身につけることができた生物、といえます。

まわりにとけこみ、目立たない色が安全

夏の間は、岩や砂地や木の枝にまぎれて、目立たない茶色や灰色などをしているノウサギやライチョウは、雪の中で生活する冬になると、白い毛や羽にかかります。敵に見つかりにくくなるからです。毒をもつこん虫は、赤や黄色の目立つ色をしていて、鳥はそのこん虫を食べないものです。鳥に食われないよう、その毒のあるこん虫そっくりの、色や模様をもつ、こん虫もいます。

カラスの仲間は、近ごろは町中にたくさんいますが、昔は、森にすんでいました。森の中では、カラスの黒い色はまわりにとけこんで、あまり目立たなかつたので、カラスにとってつごうがよかったと考えられます。ヨーロッパには、おなかが白いコクマルガラス、ヒマラヤには、くちばしが黄色で、足が赤いキバシガラスという仲間もいます。

(監修・今泉 忠明)

